いわての風

足らざるを知り補う努力を

経営危機すべて人災

関洋一

一関市・企業世話人

先月中旬に発生した岩手・宮城内陸地震は、一関市の厳美から須川にかけた地区でも山肌が削り取られるなど、観光や雇用も含め、両県に大きなつめ跡を残した。

地域住民の一人として今後は早期復興を祈るばかりだが、あえて加えると、市街地の方で暮らす者の実感としては普段の生活と変わらず、地震直後の数日間、報道関係者などの入り込みでタクシーが忙しく動いているのが目立った程度だった。

そんな中、国内外から電話やメールでお見舞いをいただき、人の情けのありがたさを実感した。

今回の地震による多くの被害は天災ということになろうが、先の中国・四川大地震では、学校の校舎崩壊による被害も甚大で、一部は人災ではないか、との指摘もあるようだ。

天災の代表格である地震被害でも、少しは人間の知恵や努力で軽減できるのかもしれない。今後の科学技術の進歩と合わせ、その可能性に期待したい。

さて、このように自然災害は天災の要素がほとんどだが、企業経営の場合、天災要素の災害はない、と断じるのは言い過ぎだろうか。

「電信柱が高いのも、郵便ポストが赤いのも、すべて社長の責任だ」と企業経営者の覚悟を説いたのは、前回の本欄で取り上げた一倉定氏だ。

八年ほど前のある日、たまたま私は対照的な二人の経営者に会った。

午前中に会ったのは社員十五人のうち十三人を解雇したばかりの債務超過の赤字会社の社長。夕方は、創業五年目で年商二十億円の黒字会社の社長だった。

黒字会社の社長は、話している間「皆さんのおかげ」をたびたび口にした。みずから一営業マンの名刺を持ち、月四十冊もの本を読む。身近な成功者にはすかさずコンタクトし、教えを請う。

さらに、この社長は「経営がこわい」と言った。経営にはこれで良いという終わりがないから、今は事業がうまくいっていても決して安心できない。順調な時こそ、次の「花形商品」を育て、「金のなる木」を確立しなければならない。

また事業が悪い方に回転しだしても、なかなか逆にハンドルが切れない―といった経営判断の難しさも吐露された。

こうして黒字社長は経営の全責任を受け止め、それをまっとうすべく前向きに頑張っていた。

一方、赤字会社の社長は、一発大逆転を狙っているという。

自分の会社が立ち行かないので、仲間と別会社を立ち上げる。その事業分野は自分の専門外でよく分からないが、とりあえず自分が社長になり、実質業務は仲間たちに担ってもらうという。

何の特徴も感じられないその事業計画書には、社長の月給二百万円と書かれており、数字がむなしく見えるばかりだった。

赤字社長は、自らは何も付加価値をつくり出すことなく、破たん直前でさえ「誰かに担いでもらえる」とまだ懲りない。

一方の黒字社長は「自分の努力は、まだまだ足りない」と自戒する。

そして八年後、赤字社長の意に反して周りには誰もいなくなり、所在さえ定かでない。一方の黒字社長にはビジネスチャンスが次々に飛び込み、ますます業容を充実させている。

自らの足らざるを知り、それを謙虚に補う努力が事業を育てる。そのことに気づかないのは経営者の罪だ。

経営危機は主に経営者、さらに従業員、ときには株主や取り巻きなど、人的要素から誘発される。特に最近、バブル社長が経営のプロにあらざる「士資格者」に破たんへといざなわれるケースが目につくので、その向きは要注意だ。

経営危機は天災ではなく、まさに人災であることを、経営者は肝に銘じたい。

せき・よういち　52年紫波町生まれ。東京理科大卒。商社勤務、誘致企業取締役、県中小企業支援センター・プロジェクトマネジャーなどを経て現在は中小企業大学校講師、岩手大学客員教授、盛岡市創業支援マネジャーなど。